

配色好悪によるパーソナリティ・テストの試作

(2) 配色好悪パターンとYG性格検査

Color Combination Preference as a Clue to Personality (2)

近江源太郎

女子美術大学

Gentarow Ohmi

下城 美香

女子美術大学美術研究科

Mika Simojo

崔 貞伊

〃

Choi Jung Yi

笹井 明美

〃

Hiromi Sasai

1. はじめに

前報によって、人びとの配色好悪の基本パターンを抽出した。これらとパーソナリティとの関係を検討する。

基本的には、好みが類似している人たちはパーソナリティも類似しているのではないかと。また、好みが異なっていれば、その背景にあるパーソナリティも異なっているのではないかと仮定できよう。そこで、前報によって抽出された好悪パターン上の特徴と、性格検査結果との関係を知ろうとする。あわせて、前報でとりあげた配色の諸基準の影響についても検討する。

2. 方法

配色見本2点を組み合わせて提示し、「好きな」方を選ばせた。また同一被験者に性格検査を実施した。

(1) 前報で使用した配色見本のうちから選びだして、二色配色60対、三色配色63対、合計123対の配色見本対を編成した。対を構成した基準は主として次による。①前報の数量化3類によって導かれた各軸ごとに両極に位置する配色。②各軸を直交させた空間で反対の象限に含まれる配色。③前報に紹介した配色選定基準(1)による配色。つまり、色彩感情空間において相対立する関係にある配色。

(2) 性格検査。『YG性格検査』（一般用）を、定められた実施方法・判定方法によって使用した。

(3) 被調査者。美術系大学生64名（男24、

女40）。

(4) 手続き。通常の教室で、配色見本対を5秒程度提示して「好きな」方を選択させた。その後、性格検査を実施した。二者択一形式をとった理由は、絶対判断よりも好みの特徴を鮮明にとらえ得るのではないかと、また判断がより安定するのではないかと考えたためである。

3. 結果と考察

(1) 好悪パターンと性格検査結果との関係。好悪データを、二色配色・三色配色ごとに数量化3類によって解析した。5軸まで計算し、その累積寄与率は三色配色が37.4%、二色配色が34.8%であった。次に、各軸の数値と、『YG性格検査』の特性ごとの値および各系統値との間の相関係数を求めると、表1のとうりである。これは二色配色のケースであるが三色配色においても、極めて似通った傾向が認められてる。好悪データの第5軸に性格との深い関係が読みとれる。より大きな寄与率をもつ第1～4軸と性格特性との関係が相対的に希薄の点は、これらがここでとりあげた性格特性以外の要因によるものか、より普遍的な快さを反映しているものであるか、今後検討する必要がある。

第5軸と相関の高い特性は、端的にはE系統値とD系統値とに集約される、と見てよかろう。E系統値は「情緒不安定、非活動的、非衝動的、内省的、非主導的」、D系統値はその逆に「情緒的安定、活動的、

衝動的、内省的でない、主導権を握る」といった傾向の指標である。12の性格特性を6つの性格因子に要約すると、「情緒の安定」および「非主導権」の両因子が好悪の第5軸と特に高い相関を示している。前者が躁うつ質とかかわる特性であるとすれば色彩実験やロールシャッハ・テストにおいて同気質が色反応優位の傾向を見せる点と合致していることになる。また、後者のうち「社会的外向」については、アイゼンクの性格論との関係を推測したい。彼は、色彩のみならず造形芸術の好悪が向性に規定され、さらに向性は大腦皮質の覚醒水準に規定される、と推測している。今回のデータにおいて、社会的向性が好悪とある程度の相関を示した事実は、アイゼンクの指摘との関係でさらに分析する必要があるだろう。

12の性格特性ごとにみると、5%以上の有意水準による場合、好悪パタンのいずれの軸とも相関が認められないのは、次の4特性である「抑うつ性」「神経質」「協調的」「攻撃的」。また、三色配色のケースでは、「抑うつ性」「劣等感」「客観的」「協調的」の4尺度において同様の水準で有意性が認められない。両ケースに共通す

る特性は「抑うつ性」と「協調性」であり、この2特性については配色好悪との関連が小さいと見込むべきであろう。ただ、病者の絵画表現において抑うつ傾向は色彩使用の特徴と結合する事実も指摘されており、今後さらにデータを蓄積した方がよいと思われる。

上述のように、二色配色、三色配色とも相関係数の傾向は近似している。したがって配色好悪と性格特性との間にはある程度一貫した関係が存在するとみなしてよい。ただし、その関係の強さは、相関係数にして最大でも0.46程度である。なお、好悪の第5軸の色彩上の特徴は、基本的には色相よりもトーンに規定されているようである。概して低明度のトーン、またトーンの関係が配色の原理にはずれた配色を好む者と、明るいトーンや配色の原理に合った配色を好む者とが対極をなしている。

(2) 配色見本対について。123点の配色見本対ごとに、各性格特性の粗点の平均値に差があるか否かをみても、ほぼ上述の傾向に近い特徴が認められる。情緒安定性・主導性に差がみられ、社会的適応に有意差が定め難い。

表1 配色好悪パターンと性格特性との相関係数(二色配色)

性格特性				1軸	2軸	3軸	4軸	5軸
情緒的安定	—	抑うつ性	小 D	-.11	.07	.12	-.10	-.24+
		気分の変化	小 C	-.17	.04	-.20	.01	-.27*
		劣等感	小 I	-.08	-.11	.17	.04	-.33**
		神経質でない	小 N	-.15	.07	.03	.08	-.14
社会的適応	—	客観的	小 O	.05	.04	-.19	-.26*	-.06
		協調的	小 Co	.02	.21+	.01	-.12	-.01
非活動的	—	攻撃的でない	小 Ag	.07	.07	-.08	.04	.04
		非活動的	小 G	.16	-.13	-.13	.07	.39**
非衝動的	—	のんきでない	小 R	-.25*	.02	-.29*	.00	.14
		思考的内向	小 T	.05	-.29*	-.04	.03	.22+
内省的	—	服従的	小 A	.05	-.22+	-.12	.23+	.46**
		社会的内向	小 S	.11	-.19	-.17	.10	.44**
類 型	—	E 型		-.08	-.06	-.05	.20	.33**
		C 型		-.15	.11	-.14	.23+	.04
		A 型		-.13	-.02	.10	-.02	.07
		B 型		.25*	-.08	.01	-.20	-.11
		D 型		.16	.10	-.04	-.14	-.40**

(N=64, +10%, * 5%, ** 1%でそれぞれ有意)